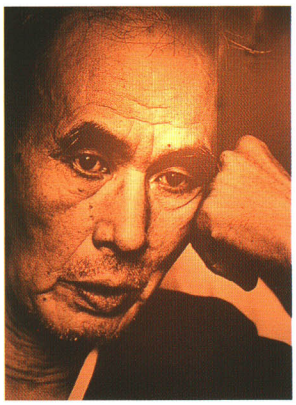
美しいむら 伝統文化

時代を越えて刻まれるたいしんの伝統文化

人々の心あたたかい暮らしを今に伝える大信村の伝統文化。そこにはいつの世も変わることのない豊かな心を垣間見ることができます。古くは、縄文時代中期の「町屋遺跡」から出土した石器、土器などから悠久のロマンを感じることができます。こうした村の歴史とともに農具や民具、その暮らしぶりを紹介している「ふるさと文化伝承館」では、子供たちを集めて「しめ縄づくり教室」などを行い、古来の技を楽しく学んでいます。

福島県の南にある大信村は、17世紀初頭白河藩領となるまで次々と領主が変わり、民が苦しんでいた時代もありました。しかし、「キュウリ天王祭り」や「ちょうちん祭り」など暮らしに根付いた祭りや慣習もたくさん誕生しました。

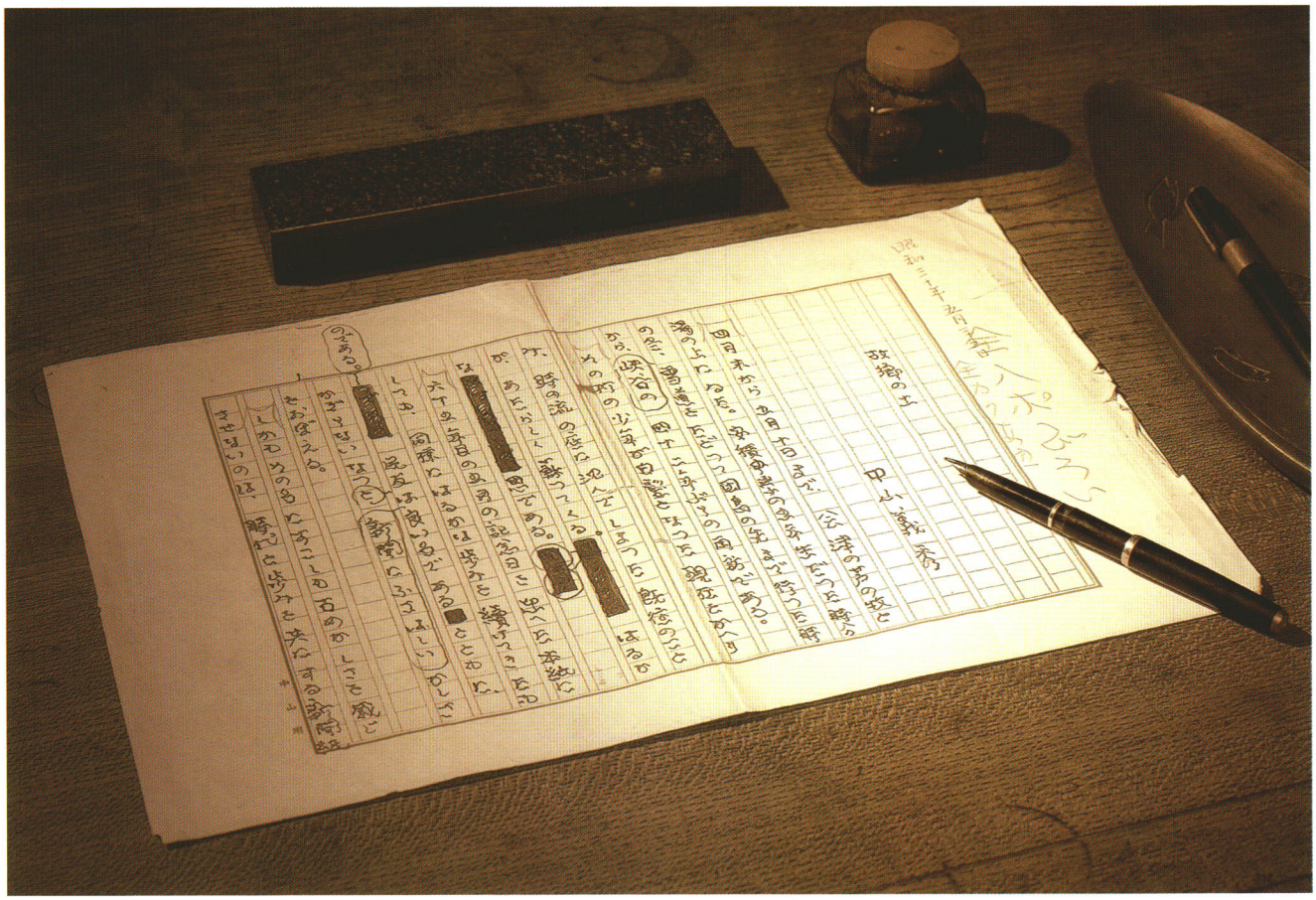
現代はこうした祭りの継承事業に加え、村に湧き出る「清水」を新たな財産として守り、後世に伝えています。



村が生んだ偉人　中山義秀の生涯

中山義秀は、明治33年（1900）、大信村（旧岩瀬郡大屋村）の中山竹蔵の三男として誕生しました。県立安積中学（現・安積高校）から早稲田大学に進学、のちの師友横光利一と知り合います。大学卒業後、三重県や千葉県で英語の教鞭をとるかたわら小説を書き続け、昭和13年『厚物咲』で第七回芥川賞を受賞、翌年発表の『碑』で文壇での地位を高めていきます。昭和39年には『咲庵』で野間文学賞受賞。さまざまな文芸活動の中で、ふるさと大信村の美しさについて何度もふれています。

晩年は、中央公論連載の「芭蕉庵桃青」が未完のまま、昭和44年8月、69歳の生涯を閉じました。明治、大正、昭和と3つの時代を駆け抜け、厳しく自己の作品と向かい合ったその姿は、「孤高の文士」「最後の文士」と称され、文学の求道精神を現代に伝えています。



キラリと光る文豪の里づくりプラン

「中山義秀記念文学賞」

「中山義秀記念文学賞」は、平成５年の記念館開設と同時に中山義秀顕彰会によって始められました。この賞は、国内で過去一年間に発表された歴史文学が対象となるもので、全国の自治体のうち村で本格的な文学賞を制定しているのは大信村だけということもあり、記念文学館と併せて全国への村の情報発信の一つとなっています。